

2022 年度 駒沢女子大学

「学修到達度の確認」実施報告書

2 年次終了時確認の報告書

3 年次終了時確認の報告書

教育指針に関する検討委員会

「学修到達度の確認」実施報告書

1. 実施方法

【目的】

日本文化専攻のディプロマ・ポリシーから導き出された 8 項目の学修指針（教育目標）に対する学修成果について、2 年終了時における到達度を確認することを目的とする。

【方法】

「学修到達度確認表」に基づく資料「学修到達度の確認」を用いて、3 年次の 4 月下旬に実施した。「学修到達度の確認」は、対象学生に Classroom を通じて Google スプレッドシートで配付し、パソコン上での入力とした。

学生は、8 つの学修指針の各項目について学習到達度確認表の各到達レベルの内容を参考に、1～4 の 4 段階で自己診断した数値を入力し、各項目への自己診断をもとに、「自己評価コメント」を記入する。担任は「担任コメント」を記入の上、学生に返却する。

2. 集計結果

【実施人数／対象者数】

- ・ 3 年生 27 名／在籍 33 名（編入生 2 名を除く）
- ・ 未提出 6 名

【集計結果】

- ・ 8 項目の学修指針ごとに、自己診断の平均値等を集計（別紙「集計結果」）
- ・ 全対象者が記入した「自己評価コメント」を集計（別紙「自己評価コメント」）

（表 1：平均値・最大値・最小値）

	教養力	人間性	コミ力	社会性	専門力	判断力	技術力	実践力
平均値	2.5	2.6	2.2	2.3	2.5	2.2	2.2	2.2
最高値	4	4	4	4	4	4	4	4
最低値	1	1	1	1	1	1	1	1

【参考資料】2020年度入学者（昨年度）の平均値・最大値・最小値

	教養力	人間性	コミ力	社会性	専門力	判断力	技術力	実践力
平均値	2.6	2.5	2.3	2.4	2.5	2.2	2.1	2.3
最高値	4	4	4	3	4	4	4	3
最低値	1	1	1	1	1	1	1	1

（表2：実数）

評価	教養力	人間性	コミ力	社会性	専門力	判断力	技術力	実践力
4	1	1	2	2	3	2	4	2
3	13	17	6	9	12	8	4	8
2	12	7	15	12	8	10	13	10
1	1	2	4	4	4	7	6	7

【参考資料】2020年度入学者（昨年度）の実数

評価	教養力	人間性	コミ力	社会性	専門力	判断力	技術力	実践力
4	3	2	3	0	3	1	1	0
3	16	14	10	15	13	11	7	13
2	13	16	13	16	14	13	20	16
1	1	1	7	2	3	8	5	4

3. 検証結果

平均値は、どの項目も2.0を超えている。実数において、もっとも人数が多いのは、教養力・人間性・専門力をのぞき、すべて「2」である。また、「4」の回答者が教養力・人間性で1名と少ない一方で、「1」の回答者が判断力では7名、技術力では6名、実践力では7名と多くなっている。

4. 今後の課題

平均値について、昨年度の2年終了時の数値と比較すると、ほとんど変わらない。おもに低学年の授業で身に付けるべき前4項目（教養力・人間性・コミュニケーション力・社会性）の中では、例年通りコミュニケーション力が低い傾向にある。こうした傾向は、以下に引用する自己評価コメントからもうかがえる。

日本文化に対する教養力や専門力はかなりついたと感じている。さらに理解を深めて伸ばしていきたい。コミュニケーション力において人に説明することが苦手なので、一つ一つ整理しながら話せるようにしたい。実践力については自ら進んで取り組むという面で足りていないと感じたので、積極性を持っていきたい。

教養力、人間性、専門力、技術力、実践力はレベル4まで到達してはいないがレベル3までには到達していると考え。レベル4に到達するためにはもっと努力をするべきだと思う。コミュニケーション力や社会性のレベルを上げるには文をまとめる練習をすることや他者とのコミュニケーションをもっととるべきだと思った。矛盾に気づくのが遅いのもっと気付けるように知識をつけるべきだと思った。

以上のように、コミュニケーション力不足を自覚している学生が見られるものの、その改善方法も認識しているようである。また、以下に引用する通り、本専攻の学修目標を踏まえて、今後の学習計画を立てている回答も見られた。

日本文化の特徴を整理した上で自らの考えを構築し、資料を挙げながら発信する教養力・専門力は1～2年次を通して着実に備わっていているように思います。また、多角的な視点から日本文化を学ぶことで問題意識を深め、適切に知識を応用していくことに関しても、成長を実感しています。しかし、矛盾点を見出して論理的に批判したり、計画的に解決するための判断力や実践力は他の能力に比べて目標に到達できていないと身に染みて感じているので、3～4年次は意識して努めていきたいと思っています。

自分なりに日本文化について解釈し、考察を深めることが1年修了時と比べてもできるようになったように思う。日本の社会には本当に身近なところに文化的な側面があり、宗教的な行事も入り混じって形成されているなど調べていくうちに感じるようになったので、さらに多角的な視点で日本の文化を見てみたいと思う。

自己診断を進めることで、自分が思っているよりもできるようになったことが少ないことが分かった。受動的に知識を得ることはできたように思うが、その知識をどう活かしていくのか、与えられた情報に対する問いかけなどを考えられていなかった。学んだ知識を社会に活かし、自分の意見を分かりやすく伝えられるようにならなければならない。

これらの回答は、「日本の文化の特徴を自ら発見し、その魅力を世界に発信する力を身に付ける」という日本文化専攻の学修目標を意識して2年次までの学習に取り組み、一定の成果を得たと自覚し、3年次以降の学習でも、目標達成のために取り組むべき課題を的確に捉えている点で、本専攻の学修目標が、実態レベルで学生に浸透してきていることを示している。

むしろ、専攻の学修目標と8項目の学修指針が、有機的に結びついていないこと、つまり、8項目の学修指針のあり方（項目が多すぎて目標が定まらない）にこそ、再検討の必要

があるとする。

以上

人間文化学類人間関係専攻「学修到達度の確認」調査結果報告書

1. 調査概要

調査目的：学生の学修到達度自己診断結果の現状を把握し、今後の教育の質的向上を図る

実施期間：2023年5月8日～2023年5月31日

実施方法：ウェブアンケート調査（Google フォーム利用）

対象者：2023年度人間関係専攻3年在籍者

回答者数数/対象者数：51名/84名（うち、1名は休学中）（回答率61.4%）

質問内容：

人間関係専攻学修到達度確認表にもとづき、「教養力」「人間性」「コミュニケーション力」「社会性」「専門力」「判断力」「技術力」「実践力」の8項目の能力に関する自己評価について、それぞれ、4「非常に身についた」(lv.4)、3「かなり身についた」(lv.3)、2「身についた」(lv.2)、1「少しは身についた」(lv.1)の4段階での回答を得た。また、2年間の学修到達度に関する自己評価について、自由記述での回答を得た。質問紙は参考資料①を参照。

2. 集計結果

表 1) 平均値

	教養力	人間性	コミュニケーション力	社会性	専門力	判断力	技術力	実践力
平均値	2.9	3.1	2.9	2.9	2.6	2.7	2.4	2.7

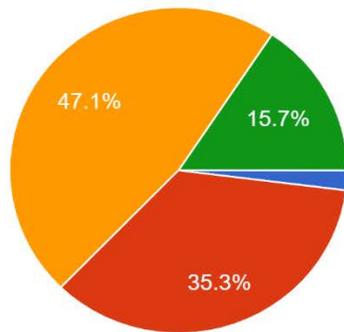
表 2) 8つの能力等について各レベルを選択した学生の人数(人)

	教養力	人間性	コミュニケーション力	社会性	専門力	判断力	技術力	実践力
lv.4	1	5	5	5	1	2	1	3
lv.3	18	22	14	24	10	19	9	17
lv.2	24	21	22	16	21	22	22	22
lv.1	8	3	10	6	5	5	5	9

図 1) 学修到達度確認表8能力等における各レベル（自己評価）の割合（%） 各レベル（自己評価）の割合（%）

教養力

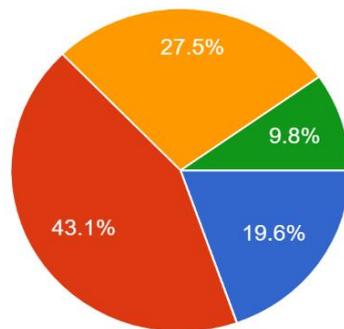
51 件の回答



- レベル4 (秀)
- レベル3 (優)
- レベル2 (良)
- レベル1 (可)

コミュニケーション力

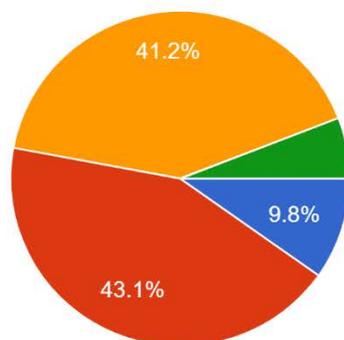
51 件の回答



- レベル4 (秀)
- レベル3 (優)
- レベル2 (良)
- レベル1 (可)

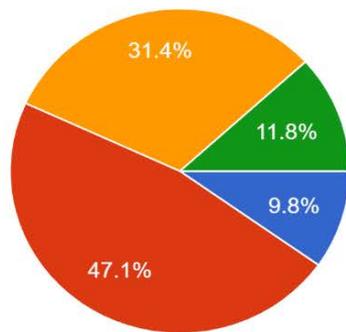
人間性

51 件の回答



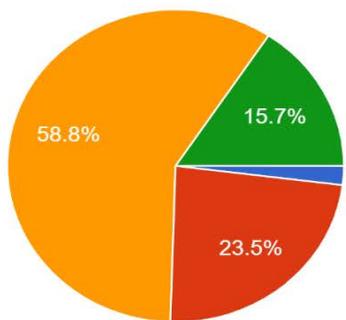
- レベル4 (秀)
- レベル3 (優)
- レベル2 (良)
- レベル1 (可)

社会性
51件の回答



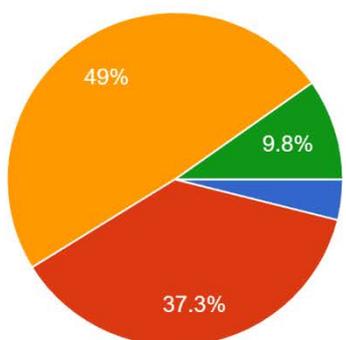
- レベル4 (秀)
- レベル3 (優)
- レベル2 (良)
- レベル1 (可)

専門力
51件の回答



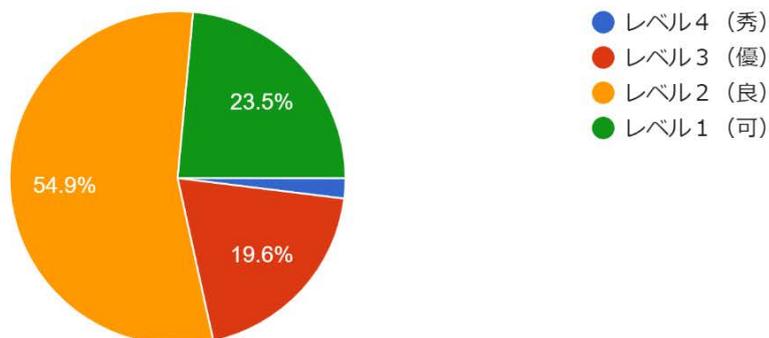
- レベル4 (秀)
- レベル3 (優)
- レベル2 (良)
- レベル1 (可)

判断力
51件の回答

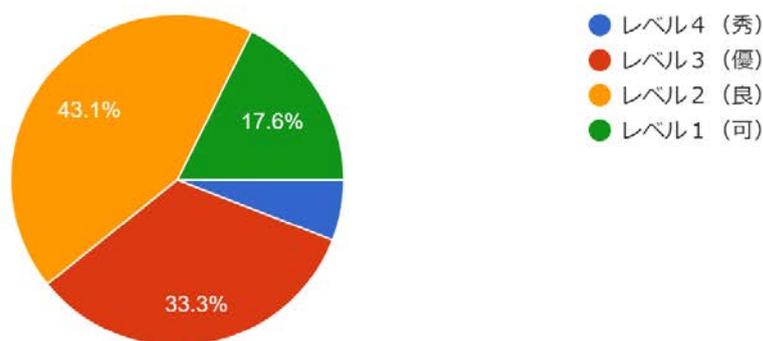


- レベル4 (秀)
- レベル3 (優)
- レベル2 (良)
- レベル1 (可)

技術力
51件の回答



実践力
51件の回答



3. 検証結果

人間関係専攻のカリキュラムポリシーに基づく学習到達度の測定の実施結果をまとめると以下のようになる。

各能力等の自己評価の平均値は表 1 の通りである。

図 1 に示された通り、学修指針に示される 8 つの能力のうち、「教養力」「人間性」「専門力」「判断力」で 3 「かなり身についた」(lv.3) と 2 「身についた」(lv.2) を選択した者が 80% を超え、残る項目の「コミュニケーション力」「社会性」「技術力」「実践力」で 3 と 2 選択した者が 70% を超えた。2 年生終了時の調査ということで、大学教育の前半を終えた段階であることを考えれば、全体的に見れば悪くはない結果と受け止められる。しかし、細かく解答の内訳を見れば、いずれの設問に対しても最低評価 1 「少しは身についた」(lv.1) を選択した者が一定数おり、「教養力」「専門力」「技術力」「実践力」では 2 桁の割合に上っている。中でも「技術力」は 23.5% という

多さが目立つ。ほとんどの専門科目の履修は配当年次が2年次以降であること、専門ゼミに所属して自分自身の研究テーマを持って研究を進めるのもこれからの時点での調査であることを考えると、今後専門ゼミでの学修や自身のテーマで研究を進める経験を積むことで、これらの項目に上位の回答が増えることが期待される。

しかしその一方で、本学の特色として世間に積極的に訴え続けている学生1人1人の顔が見える少人数教育という観点からすれば、「専門力」「技術力」「実践力」の評価が低かったことにつながる要因と問題点が見えてくる。昨年度までに比すれば若干改善されたとはいえ、人間関係専攻は1人当たりの教員が担任する学生数が本学で飛び抜けて大きい。専門分野の必修授業などで高度な専門的な内容を、ディスカッションを交えながらじっくり進めるアクティブラーニングの授業の履修者数が、80~200にも上ることが毎年のように起こり、その結果、じっくり対話を重ねて思考を深め、専門性や技術力を身に付けてもらえるような授業運営が困難になり、講義形式の中にグループディスカッションを交える程度に変えざるをえなくなる場合がしばしば見受けられる。このように履修者数の多い専門科目において個々の学生の学修到達度を十分にケアすることができなかったことが、こうした結果の要因の1つとして考えられる。少人数教育を学外にアピールすることなく10名程度の授業がほとんどという大学がほかにいくらか古くから存在している中で、本学が社会に向けて発信する美点を実態に沿うものにして行くことの限界を毎年感じざるを得ない現状があることもまた事実である。

また、人間関係専攻の中心軸である「コミュニケーション力」を除く残る6項目では4「非常に身についた」(lv.4)の回答がきわめて少数であった。このことからコミュニケーション力を最大の目標としている専攻カリキュラムの妥当性が分かったが、その一方で、それ以外の項目の自己評価があまり高くないとも言える。日本の若者は世界の若者の中でもっとも自己評価が低いことが各種の調査から知られており、本調査にもこの傾向が反映されている可能性が考えられる。ただしこの件に関しては、エビデンスを持った測定が技術的に困難であることと、自己評価によるものという本調査の趣旨から外れることでもあるので、これ以上の追究は放棄する。コミュニケーション力に高評価が目立った理由としては、回答者は高校生のときに新型コロナにより学校活動がかなり制約された年代で、大学入学後に段階的に日本全体で対策が緩和されて行き、それに伴い授業中の学生同士の対話や友人との交流機会が増加したことがある可能性を補足しておく。

4. 今後の課題

教員数対学生数の比の問題は、きわめて残念なことに今年度の入学者数が大幅減となったことで2023年度入学者に関してはかなり解消されることが見込まれる。しかしこれは本来の解決では決してない。他大学にはない本学の魅力、そして人間関係専攻の魅力の認知度を、受験生のみならず社会的に上昇させる具体的な方策と行動が喫緊の課題となっている。その実施を担うのは駒澤学園の宣伝広報活動や入試広報部門といった特定の部署に限るものではないし、またカリキュラムと教育内容・教育方法は教員だけが担うものでもなく、大学全体、学園全体で取り組まなければならない。さらに、卒業生や在学生在が本学のよさを感じているならそれを積極的に発信してもら

うことが、今の時代は教職員側の発信と比較にならないくらい影響力を持つ。そこで今後は、こうした調査の中に専攻の魅力が学生がどうとらえているか測定できる項目を設けて、その結果を発信材料に使うことも検討してよいのではないか。

人間関係専攻を含む人文社会科学の特性として、じっくりと時間をかけて腰を据えて取り組まないと学修効果が出にくいことや、学修効果を本人が実感するのに長い時間がかかることが挙げられる。大学を卒業して20年30年と経た後で、何かの経験をきっかけに「あの授業で聞いたのはこのことだったのか」と腑に落ちることは珍しくない。自由記述欄(資料②参照)に、何となく通学していることで評価が高くならなかったという回答や、授業を漫然と聴くばかりで授業に自ら関わろうという態度で聞いていなかったという回答が見られるように、問題意識や関心を持って授業に臨むか否かによって同じ授業でも得られるものが大きく差が出るのも、人文社会科学の授業の特性である。こうした特性ゆえ、ただですら効果測定のしにくい分野である上に、入学後2年余りという短期間で効果を実感することと、それを測定することの難しさを、毎回痛感させられる。

とはいえ、教員も手をこまぬいてはいけない。激しく変動するいまの社会や価値観の中を学生がたくましく生き抜く力になるよう、今後もわれわれはカリキュラムや学修方法の工夫を続けて行く。

(文責 石田かおり)

参考資料①

人間関係専攻 2023 年度 3 年生

学修到達度に関する自己評価 調査実施時配布資料（質問紙）

学修到達度に関する自己評価（人間関係専攻）

2023 年度の 3 年生の皆さん

大学でのこれまでの学修がどの程度達成されたかについて、あなた自身の自己評価をお聞きします。

ここで回答した自己評価によって、成績、大学生活、その他において有利/不利が生じることは一切ありませんので、思った通りに回答してください。

※以下、8 つの択一式の設問と、1 つの自由記述式の設問があります。ご協力よろしくお願いします。

*必須

1. メールアドレス *

各技能の到達度について

以下 8 つの技能がどの程度身についたかを自分自身で判断し、それぞれについて、以下のいずれかを選択してください。

レベル4(秀):非常に身についた

レベル3(優):かなり身についた

レベル2(良):身についた

レベル1(可):少しは身についた

なお、各技能のレベル詳細についてはフォーム末尾の学修指針詳細説明を参照してください。

教養力 *

1 つだけマークしてください。

レベル4(秀)

レベル3(優)

レベル2(良)

レベル1(可)

人間性 *

1 つだけマークしてください。

レベル4(秀)

レベル3(優)

レベル2(良)

レベル1(可)

コミュニケーション力 * 1 つだけマークしてください。

レベル4(秀)

レベル3(優)

レベル2(良)

レベル1(可)

社会性 *

1 つだけマークしてください。

レベル4(秀)

レベル3(優)

レベル2(良)

レベル1(可)

専門力 *

1 つだけマークしてください。

レベル4(秀)

レベル3(優)

レベル2(良)

レベル1(可)

判断力 *

1 つだけマークしてください。

レベル4(秀)

レベル3(優)

レベル2(良)

レベル1(可)

技術力 *

1 つだけマークしてください。

レベル4(秀)

レベル3(優)

レベル2(良)

レベル1(可)

実践力 *

1 つだけマークしてください。

レベル4(秀)

レベル3(優)

レベル2(良)

レベル1(可)

2 年間の学修到達度に関する自分自身の評価について、自由に記述してください。

学修到達度詳細説明

人間関係専攻学修到達度確認表					
教育目標	学修指針	レベル4（秀）	レベル3（優）	レベル2（良）	レベル1（可）
人間関係についての基礎的な教養と、人間性への深い理解力の養成	教養力	人間関係に関する十分な基礎的教養を有し、さらにそれを自分で高めていくことができる。	人間関係に関する基礎的な知識を有し、それを高める方法を知っている。	自分自身の人間関係に関する基礎的な知識で、足りない部分を認識できる。	人間関係について、自分の知っていることを述べることができる。
	人間性	自立した人間としての思考力を有し、自分自身を理解し自己の価値観・世界観を確立している。	自立した思考の必要性を理解し、自分自身の価値観を構築しようと努力している。	自分自身について客観的に見つめることができるようになる。	自分らしさとは何かを考えるようになる。
他人に共感し理解するコミュニケーション力と、社会に積極的に関わろうとする自立した思考力の養成	コミュニケーション力	他人に共感し理解できる力を有する。また多様な価値観に応じて柔軟に自分自身を主張・発信することができる。	他者の存在を公平に認識し、それに対して理解し共感しながら自分の意見を発信できる。	他者の存在を公平に認識し、それに対して理解し共感することができる。	他者の存在を認めることができ、それぞれの価値観があることを理解している。
	社会性	積極的に多様な集団や社会と関わることができ、自己の役割を考え貢献できるような努力し達成する力がある。	グループワークなど集団作業において目標を自覚し、自分の役割を考え達成するよう努力できる。	チームワークを理解し、その一員として積極的に関わろうとする意欲があり、実行できる。	集団活動のメンバーとして何が求められているか、必要な要素を知ることができる。
人間関係に関する専門的な知識と、人間社会の多様なあり方を理解し的確な判断ができる遠慮力の養成	専門力	専攻するテーマを中心に、人間関係に関する専門的な知識を有し、それを高める方法を知っている。	専攻するテーマについて、多角的に情報を整理した上で根拠を示しつつ考察することができる。	専攻するテーマについて、多角的に情報を整理することができる。	専攻するテーマについて、情報を集めることができる。
	判断力	人間や社会に関して直面する諸問題について課題を発見し、自分なりの解決策を見つげることができる。	人間や社会に存在する多様な問題について自己の視点から分析し、自分の言葉で論じることができる。	人間や社会におけるさまざまな問題を自己の関心に即して具体的に挙げることができる。	人間や社会に関するさまざまな問題があることを理解する力がある。
社会と文化に関する知識を日々の暮らしの中で生かせる技術力と、多様な問題に対して解決へ自ら行動する実践力の養成	技術力	社会と文化に関して学んだ知識・技術を自分の生活に取り込む適応力があり、さらにそれを高めることができる。	社会と文化に関して学んだ知識や技術を自己の生活に活かそうと努力できる。	社会と文化に関しての知識や技術と、自分の生活との関連性を認識できる。	社会と文化に関しての知識や技術を自分のものにしていく。
	実践力	生活する中で起きる多様な問題に積極的に取り組む行動力と、解決できる実行力を有する。	生活する中で起きる多様な問題に自分なりに取り組む行動力と解決できる実行力がある。	生活する中で起きる多様な問題に自分なりに取り組む行動力がある。	生活する中で起きる多様な問題に自分なりに取り組もうと努力する。

参考資料②

人間関係専攻 2023 年度 3 年生 学修到達度に関する自己評価 自由記述欄

2023年5月31日

教育研究推進センター

2023年度人間文化学類 英語コミュニケーション専攻 学修到達度の評価結果について(報告)

表題の件につきまして、人間文化学類 英語コミュニケーション専攻のディプロマ・ポリシーにもとづき、学生の学修到達度について自己評価表を用いて評価を行いましたので、その結果について概略を報告いたします。

1 対象学生：人間文化学類 英語コミュニケーション専攻3年

2 実施時期：2023年4月

3 評価方法：学生のポートフォリオの一環として作成された「学修到達度自己評価表」と「人間文化学類 英語コミュニケーション専攻(添付資料)のデータファイル」を、3年生に対して各ゼミ担当より配布し、現在の自分の到達度について Google Forms を使って回答を収集した。

4 結果と考察

4.1 概観

在籍者28名のうち、長期欠席中の2名の学生と休学1名を除く25名を対象とした。

結果: 対象者25名のうち、25名から回答を得た(回答率100%)。レベル別占有率は以下の表のとおりである。黄色は最も高い数値を表している。

2023年度学修到達度自己評価表

	質問項目	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
2年次	Q1(教養力)世界の言語(英語)・社会・文化等に関する基本的な知識はどれくらいありますか?	16.0	64.0	20.0	0.0
2年次	Q2(人間性)多様な価値観をどれくらい受け入れられますか?	8.0	4.0	36.0	52.0
2年次	Q3(コミュニケーション力)社会人にふさわしい教養・語学力・表現力をどれくらい持っていますか?	4.0	60.0	28.0	8.0
2年次	Q4(社会性)社会の一員として主体的に活動する意欲と責任感をどれくらい持っていますか?	4.0	28.0	48.0	20.0
2年次	Q5(専門力)世界の言語(英語)・社会・文化等に関する専門的な知識をどれくらい持っていますか?	16.0	52.0	32.0	0.0
2年次	Q6(判断力)様々な問題について分析し、判断することはどれくらいできますか?	16.0	40.0	36.0	8.0
2年次	Q7(技術力)世界の言語(英語)・社会・文化等に関する専門的な知識をどれくらい応用できますか?	8.0	68.0	20.0	4.0
2年次	Q8(実践力)学んだ専門的な知識をどれくらい社会に還元することができますか?	12.0	28.0	56.0	4.0

4年間の教育の中間地点にあたる時期であるため、概ねレベル2以上の自己評価となった。とりわけ、主に教養科目で学ぶことが期待される人間性はすでにレベル4に達している。また、社会性や実践力ではレベル3が最も高い評価となっている。2年間の学びを通じ

て高いレベルに達していると感じている学生が多いと考えられる。

しかし、一方で、教養力、コミュニケーション力および、専門力や判断力、技術力など専門性の高い項目についてはレベル2の割合が高いため、残りの2年間で修得することが期待される。

本調査も4年目となるため、昨年度との比較についても言及する。文末に提示した昨年度の結果と比べると、今年度も全体的に自己評価が高いことがわかる。中でも、人間性、社会性、実践力のレベルが高い。人間性についてはレベル4に到達していると考えられる学生が全体の半分以上を占めている。社会性と実践力についてはレベル2とレベル3を合計した値は昨年度よりも高い。調査前の説明については昨年度と差はないことを考えると、学年により集団の特徴が異なる点は興味深い。

英語コミュニケーション専攻では、必修科目である「English Workshop I・II」で実践的英語力の育成を目指した取り組みをしている。同じく必修科目である「キャリア・イングリッシュ I・II」の授業では TOEIC®テストに対応できる英語力を身につけるための授業を行なっている。さらに必修英語では e-learning などの学習機会を提供することを通して実践的英語力の育成に力を入れて指導をしてきた。これらの学修成果を測るために、2年次の4月と12月には2回 TOEIC® Listening & Reading IP テストを実施している。

コロナ禍にあって、対面授業がままならず、遠隔授業の時もあり、学習に対するモチベーションを維持しづらい環境にあったと思われるが、そのような状況であったことが嘘のように、学生間の仲も良く、意欲的に学習に取り組む学生が多く見られる。自律学習をうながす「English Workshop I・II」などにおける指導が、比較的高い自己評価につながっているものとも考えられる。

参考資料

2022 年度学修到達度自己評価表

質問項目	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4
Q1 (教養力) 世界の言語(英語)・社会・文化等に関する基本的な知識はどれくらいありますか？	17.2	51.7	27.6	3.4
Q2 (人間性) 多様な価値観をどれくらい受け入れられますか？	0.0	13.8	37.9	48.3
Q3 (コミュニケーション力) 社会人にふさわしい教養・語学力・表現力をどれくらい持っていますか？	3.4	55.2	37.9	3.4
Q4 (社会性) 社会の一員として主体的に活動する意欲と責任感をどれくらい持っていますか？	3.4	20.7	48.3	27.6
Q5 (専門力) 世界の言語(英語)・社会・文化等に関する専門的な知識をどれくらい持っていますか？	6.9	62.1	31.0	0.0
Q6 (判断力) 様々な問題について分析し、判断することはどれくらいできますか？	6.9	34.5	51.7	6.9
Q7 (技術力) 世界の言語(英語)・社会・文化等に関する専門的な知識をどれくらい応用できますか？	0.0	62.1	34.5	0.0
Q8 (実践力) 学んだ専門的知識をどれくらい社会に還元することができますか？	10.3	27.6	51.7	10.3

単位：%

以上

文責 中野達也

2023年度観光文化学類学修到達度評価結果（報告）

2023年度観光文化学類の2年終了時学修到達度自己評価の結果を以下のとおり報告する。

1. 学修到達度評価概要

- (1) 対象：人間総合学群観光文化学類3年全員
在籍者57名中(編入生5名含む)49名より回答を得た（回答率85.9%）。
- (2) 実施時期：2023年5月
- (3) 実施方法：「学修到達度自己評価&検定試験・資格試験受験状況」の調査表に基づきGoogleフォームを作成し、各専門ゼミで学修到達度について説明したうえで、2年次終了時の到達度について自己評価させるとともに、検定・資格試験の受験状況を調査した。
- (4) 評価方法：学修到達度確認表(履修ガイド2020 p.7)のレベル4(秀)を基準に3(到達している)、2(ある程度到達している)、1(まだ到達していない)の3段階評価とした。評価項目は表1のとおり。

表1 学修自己到達度評価項目

項目
1a 教養力: 観光・文化に関する広汎な知識を体系化し、高度な企画を立案・実践できる
1b 人間性: 多様な価値観を受け入れ、ホスピタリティ精神を創造的に実現することができる
2a コミュニケーション力: 社会全般の話題について相手の立場を理解し、自分の考えを正確に表現しながら議論することができる
2b 社会性: 自分の社会的使命と責任を自覚し、主体的に社会的活動をやりとげることができる
3a 専門力: 観光・文化に関する情報を収集・整理し、知識を体系化して活用することができる
3b 判断力: 収集・整理した情報を批判的に分析し、独自の主張を論理的に展開することができる
4a 技術力: 研究を論理的で説得力のあるレポートにまとめ、プレゼンテーション・質疑応答することができる
4b 実践力: 観光・文化に関する問題を自ら発見し、主体的・計画的な取り組みを通して解決策を導くことができる

2. 学修到達度自己評価結果概要

(1) 自己評価分析結果

レーダーチャート(図1)からは、1b 人間性、2a コミュニケーション力、2b 社会性、3a 専門力が概ね2(ある程度到達している)の評価であった。これらは、1~2年次の教養科目の履修によるものだと考えられる。これに対し、4a 技術力、3b 判断力の平均値は低い傾向にあった。観光文化学類では2年から本格的に専門科目が始まるため、2年終了時点である程度は専門力が身についたという評価につながった一方、同学年にはゼミの設定がないため、「研究を論理的で説得力のあるレポートにまとめ、プレゼンテーション・質疑応答をする」という技術力は低い自己評価にとどまっているものとみられる。他の学年での自己評価などを参考に、例えば2年からゼミ形式の授業を導入することが学修到達度の観点から有効なのか今後検討が必要である。また、実践力に関しては、2年生全員を対象とする宿泊研修やさまざまな企業と連携したインターンシップ実習、有志学生によるツーリズムコマジョの取組など、大学の外に出て社会で学ぶ活動を引き続き充実させていきたい。

(2) 自由記述分析結果

次に、2年間の振り返りと卒業までにどのような項目を伸ばしたいかということについての自由記述をテキストマイニングで分析した。単語の頻出回数と重要度を加味して抽出された特徴語の1つである「プレゼンテーション」に着目し(図2)、具体的な記述を紹介する。

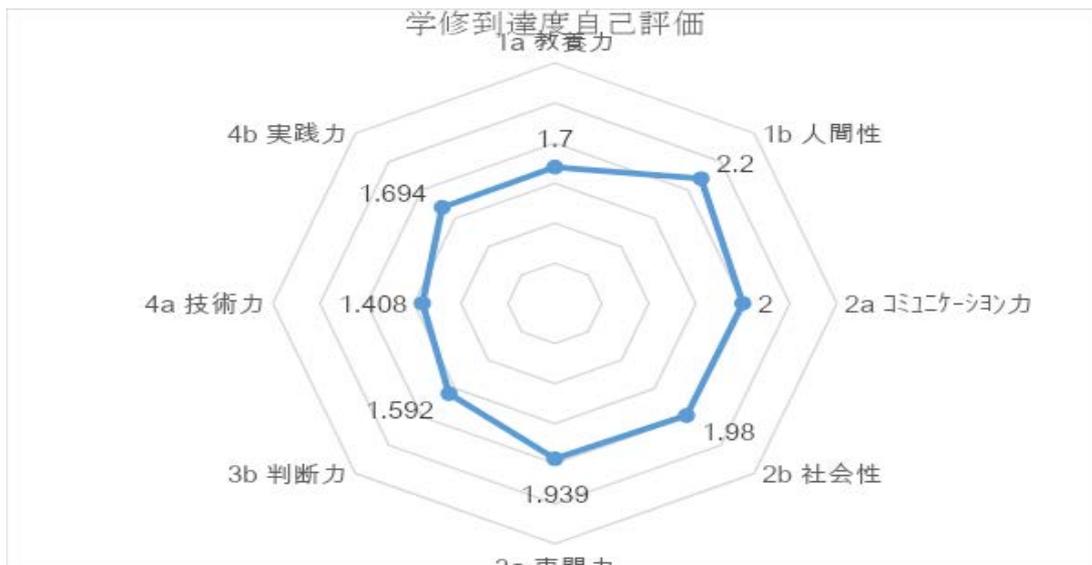


図1 学修到達度自己評価平均値

社会に出てもプレゼンテーションの力は必要になると学生自身が自覚していること、それゆえ専門ゼミでプレゼンテーションを行う機会に期待していることがうかがえる。また、自由記述の内容は、2.(1)の結果（プレゼンテーションなどを含む技術力の自己評価の低さ）を裏付けるものであった。3年以降の学び、特に専門ゼミにおいて、レポートやゼミ論文の書き方、プレゼンテーションの技法などについて、学生自身に経験をさせながら体得させる指導が引き続き求められる。

■ 名詞	スコア	出現頻度	■ 動詞	スコア	出現頻度
プレゼンテーション	77.24	13	学ぶ	12.33	17
コミュニケーション力	28.02	5	伸ばす	11.67	16
ホスピタリティ	27.86	6	取り組む	7.11	6
2年間	26.76	12	伸ばせる	2.12	2
観光	25.28	23	活かす	1.54	1
判断力	8.71	4	学べる	1.45	2
知識	7.30	14	活かす	1.42	3
レポート	6.63	11	深める	1.22	2
学び	6.37	4	導き出す	1.21	1
教養	5.58	4	しぼる	1.15	1
技術力	4.98	3	できる	1.06	29
積極的	4.69	6	仕組む	0.86	1
到達	4.27	5	しらべる	0.70	1
実践	4.24	5	蓄える	0.70	1
身	4.20	13	まとめる	0.67	5

図2 ユーザーローカル AI テキストマイニングによる自由記述の分析
(<https://textmining.userlocal.jp/>)

3. 検定試験・資格試験受験状況調査

(1) これまでに受験した検定等

各試験の受験者数、合格者数、内訳は次の表 2 のとおりである（学生の自己申告に基づく）。

2022 年度から国内旅行研修と連携して、学内にて旅程管理研修を実施したところ、国内旅程管理主任者の取得者が最多となった（学生の申告では 16 名が取得となっているが、研修受講者全員が合格している）。次に多いものとして、語学に関する資格（実用英語検定、TOEIC、観光英語検定、韓国語能力試験など）があげられる。ただし、実用英語検定は、取得級から大学入学前に取得したものと考えられる。英語に関しては、TOEIC・観光英語検定ともに実力不足が目立つ。語学力が重視される業種への就職を考えている学生に対しては、事前対策の必要性を語学の授業でしっかり認識させたい。世界遺産検定は例年人気の資格であり、13 名が受験し 10 名が合格している。

上記の受験状況からは、学内で受験可能な資格に挑戦する学生が多いことがわかる。したがって、資格取得を後押しするためには、学内実施の資格試験の充実（種類・回数）は欠かせない。今後も学修支援センターの支援を得つつ進めたい。

なお、2 年次終了時点において、検定・資格未受験の学生が 4 名、受験したものの未取得の学生が 10 名いた。学生が希望する業種・職種に応じた資格取得を、個別面談やゼミでの指導などを通して助言していく必要がある。

(2) 卒業までに受験予定の試験等

学生が今後卒業までに受験を考えている試験は以下のとおりである。

- ・ TOEIC 24 名
- ・ 秘書検定 15 名
- ・ 世界遺産検定 12 名
- ・ 国内旅行業務取扱管理者 8 名
- ・ 観光英語検定 7 名
- ・ 実用英語技能検定 4 名
- ・ 簿記検定/サービス接客検定/色彩検定/日本化粧品検定/ MOS 検定 各 2 名
- ・ TOEFL/ドイツ語検定/スペイン語検定/フランス語検定/漢字検定/介護能力試験/マナープロトコール検定 各 1 名
- ・ その他 各 1 名

(旅行やホテル関連の検定、韓国語や中国語など何かしらの言語の検定、未定)

表 2 各試験の受験者数、合格者数、詳細内容

検定の種類	受験(名)	合格(名)	内訳
旅程管理研修 (国内旅程管理主任者)	20	16	
実用英語技能検定	19	16	2級6名、準2級7名、3級3名合格
TOEIC	16	11	600点以上1名、500点以上4名、400点以上4名、400点以下2名
世界遺産検定	13	10	2級2名、3級8名合格
観光英語検定	9	3	2級1名、3級2名合格
漢字検定	8	7	準2級1名、3級4名、4級2名合格
アンティーク検定	7	6	3級合格3名、合格級不明3名
国内旅行業取扱管理者	4	-	
韓国語能力試験 (TOPIK)	3	3	2級1名、3級1名、4級1名合格
温泉ソムリエ	2	2	-
秘書検定	2	1	2級1名合格
日本化粧品検定	1	-	
フランス語検定	1	1	3級1名合格
中国語検定	1	1	2級1名合格
総合旅行業取扱管理者	1	-	
インバウンド検定	1	1	
ビジネス日本語検定	1	1	900点1名
JPLT(日本語能力試験)	1	1	N1合格1名
ユニバーサルマナー検定		1	3級取得1名
公益財団法人日本習字教育財団漢字部門中等師範免許状取得		1	
該当なし	4	10	(受験なし4名、取得資格なし10名)

すでに受験者が多い TOEIC などの英語資格試験と世界遺産検定のほか、秘書検定を考えている学生が多い。また、この学年からの合格者が出ていない国内旅行業務取扱管理者に挑戦したいという学生も 8 名いる。この結果も、学内で受検可能、あるいは授業や特別講義、対策講座などが充実している資格への関心の高さを示唆している。引き続き、ゼミや専門科目の授業において情報を提供し、助言をするなどして、より多くの学生の資格取得へとつなげていきたい。

4. 今後の課題

自己評価に基づく学修到達度評価では、学生自身が客観的な立ち位置を把握するのは難しい。抽象的になりがちな評価項目に対し、できるだけ明確な基準を設ける必要がある。その一方で、項目や基準が多いと調査自体を煩雑と感じる学生も増え、回答への協力が得られにくくなることも考えられる。今後、項目の絞り込みや外部試験等とリンクした評価

方法（例えば、△△力のレベル4は〇〇試験 x 級合格相当など）を検討したい。さらに、取得資格に関する報告では、不正確な資格名や合格級や点数の未記入など信頼性に欠く回答内容が一部見られた。設問や回答方法の工夫が引き続き求められる。

また、学修到達度評価結果は、学生の自己申告に基づく現状把握に使われることはあっても、必ずしも教育の質保証に向けたデータとしてはあまり活用されていない。学生の到達度が比較的低い項目について、その到達度を向上させるために、どのような授業（科目、方法など）や授業外での支援体制（学修支援センターと連携した補習、特別講義など）が有効なのか、まずは学類で議論を深めたい。

以上
(文責 杉野知恵)

2023年度心理学類学修到達度の評価結果について（報告）

題記の件につきまして、人文学部心理学類のカリキュラム・ポリシーにもとづき、学生の学修到達度について自己評価表を用いて評価を行いましたので、その結果について報告いたします。

対象学生：人間総合学群心理学類3年

実施時期：2023年7月

評価方法：学生のポートフォリオの一環として作成された「学修到達度自己評価表」を、3年の「現代心理学実習」の履修学生を対象に配布し、学修到達度について説明したうえで、現在の自分の到達度について記入してもらった。

結果：総履修者数14名のうち、12名から回答を得た（回答率85.7%）。

平均点（範囲1～4）、および最小値・最大値は以下の表のとおり

質問項目	平均	最小	最大
教養力：人の心に関する教養的知識を、どのくらい増やせましたか？	2.50	1	3
人間性：他者に対する共感的な理解力（洞察力）を、どのくらい伸ばせましたか？	2.50	1	2
コミュニケーション力：コミュニケーションの力を、どのくらい伸ばせましたか？	2.08	1	2
社会性：他者と共同作業するための社会性を、どのくらい身につけることができましたか？	2.58	1	2
専門力：専門的な知識を活用する力を、どのくらい伸ばせましたか？	2.25	1	2
判断力：根拠に基づいて論理的に思考する力を、どのくらい伸ばせましたか？	1.92	1	3
技術力：心理学の知識を生活の中で活用する力を、どのくらい伸ばせましたか？	2.58	1	3
実践力：心理学の知識を使って社会に貢献する実践力を、どのくらい伸ばせましたか？	1.92	1	2

当初の予定よりも調査時期が遅れてしまい、4年間の教育の中間をやや過ぎた地点での実施となった。また前回のデータの参照が十分にできなかったことから、過去（1年次）の自分の評価値を回想する形での判断が入っている。回答者数も少数であったことも踏まえ、本報告書における数値については限定的なものとして取り扱うことにする。

いずれの項目も平均値は概ね「2」前後の自己評価となったが、主に教養科目で学ぶことが期待される教養力は「2」を上回り、1年次の回想評価「1.33」から明確に伸びた自覚があったことがうかがえる。コミュニケーション力については「2.50」となり、同様に1年次の回想評価「1.67」から上昇していた。他の項目についても全般的に評価向上の傾向がみられたため、学年の進行に伴う学びの成果が着実に現れてきたと推測される。一方で最大値の評価が「3」に留まった点については学生自身の謙遜なのか、あるいはこれからの自己の成長可能性に対する（学生自身の）期待を含むものなのかは定かでない。身につけたい力についての自覚的な評価について、さらに自信が深められるように指導していく必要があるのではないだろうか。

以上

2022年度 住空間デザイン学類 2年修了時「学修到達度の確認」実施報告

2022年度住空間デザイン学類「2年修了時 学修到達度の確認」について、以下の通り報告します。

1) 「学修到達度の確認」の目的

- ・2年修了時に、住空間デザイン学類のカリキュラム・マップに記載の基礎レベル（到達度lv1、lv2）が習得できているかを確認することを目的とします。
- ・4年修了時に、住空間デザイン学類のカリキュラム・マップに記載の卒業に相応しい学習成果（到達度lv3、lv4）を得られたかを確認することを目的とします。

2) 実施方法

学修到達度の確認は、「学修到達度の確認 回答用紙」【資料1】を利用して行い、対象学生の自己診断を基としました。住空間デザイン学類8つの学修指針「教養力」「人間性」「コミュニケーション力」「社会性」「専門力」「判断力」「技術力」「実践力」の下に記載された「学修到達度」を「レベル4～レベル1」の4段階評価で回答してもらいました。また「自己評価コメント」を自由記述で回答してもらいました。

3) 実施時期、対象学生および回答数

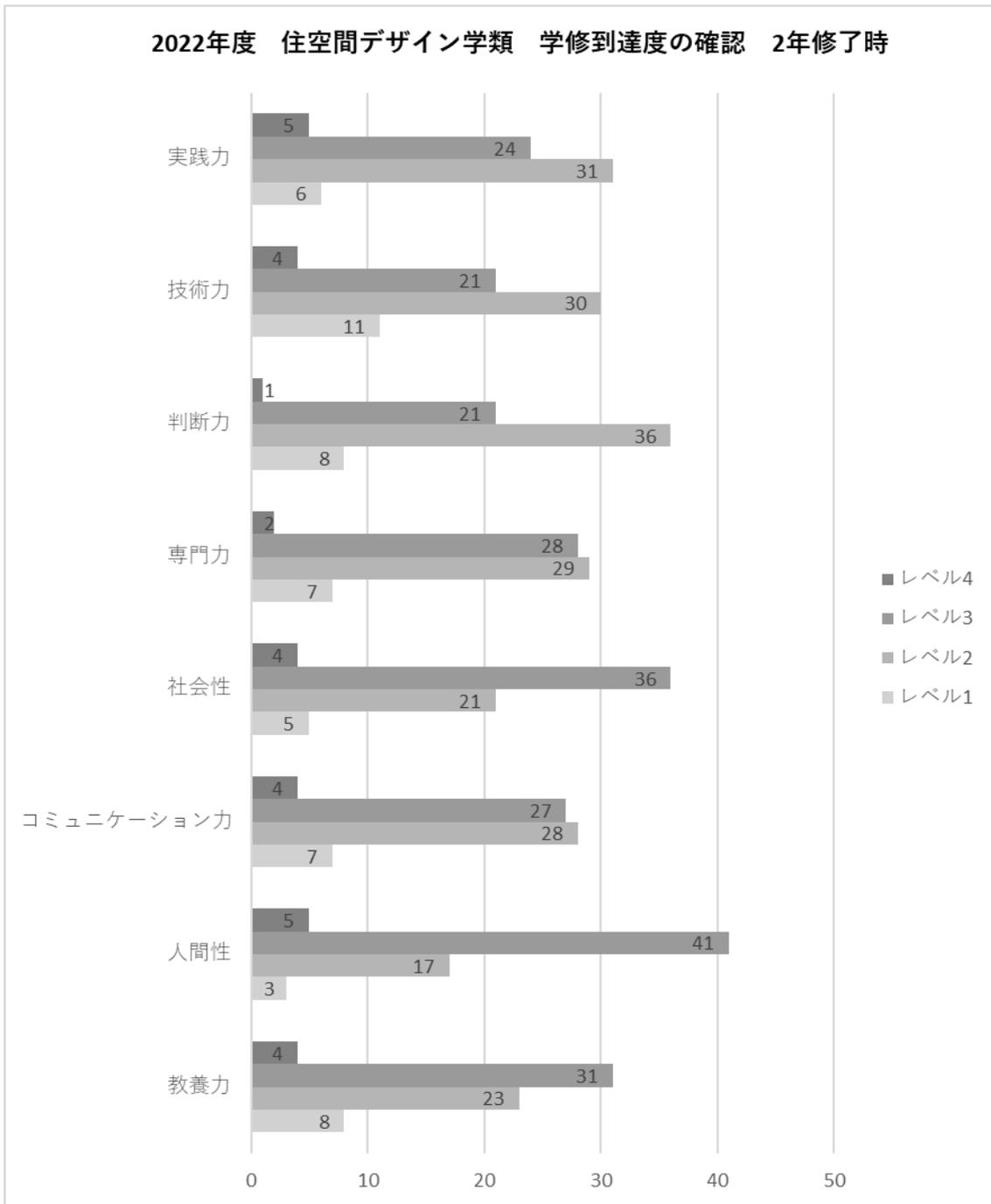
- ・実施時期：2023年5月下旬
- ・対象学生：2021年度入学 住空間デザイン学類 所属学生（現3年生）69名
- ・回答数：66名（回答率：95.6%）

4) 評価結果

学修到達度の確認 回答用紙による「学修到達度」の集計結果は表1および図1の通りです。また「自己評価コメント」の回答内容は【資料2】の通りです。

■表1 2022年度住空間デザイン学類「2年修了時 学修到達度の確認」集計結果合計（人）

	教養力	人間性	コミュニケーション力	社会性	専門力	判断力	技術力	実践力
レベル1	8	3	7	5	7	8	11	6
レベル2	23	17	28	21	29	36	30	31
レベル3	31	41	27	36	28	21	21	24
レベル4	4	5	4	4	2	1	4	5
レベル平均	2.47	2.73	2.42	2.59	2.38	2.23	2.27	2.42



■図1 2022年度住空間デザイン学類「2年修了時 学修到達度の確認」項目別集計結果（人）

5) 評価結果の分析と考察

学修到達度の評価結果は、全ての学修指針の項目において平均値が2.23～2.73の範囲に収まりました。本確認の目的である、2年修了時においてカリキュラム・マップに記載の基礎レベルであるレベル2に、「技術力」を除く全ての学修指針において85%以上の学生が到達していることが確認できました。すべての学修指針合計の平均でレベル2未満の評価をした学生は11名で、全回答者の16.7%でした。

レベル3または4に該当する自己評価の回答が多い項目は、「人間性」(69.6%)と「社会性」(60.1%)

で、昨年度と同様でした。また「**教養力**」(53.0%)の評価も比較的高いものでした。反対にレベル1または2に該当する自己評価の回答が多かった項目は、昨年度は「**コミュニケーション力**」と「**判断力**」の二項でした。「**判断力**」(66.7%)は、昨年度(61.3%)から5ポイントほど後退しましたが、「**コミュニケーション力**」(53.0%)は昨年度の67.7%から15ポイント程度大幅に改善しました。

次に学修指針の各項目における結果を分析し、考察します。

「**教養力**」と「**人間性**」は、建築・インテリアデザインから家具、陶芸、織物等くらしの環境に関する基礎的、総合的な知識と、豊かな人間性の養成を目標とする項目です。回答結果は昨年度と同様に8項目の中で評価平均が「**人間性**」が最も高く(2.73)、「**教養力**」が3番目(2.47)でした。またレベル3、4を回答した割合は「**人間性**」が69.6%で昨年度より上昇したものの、「**教養力**」が47.0%で、昨年度の結果と比較して9ポイント下降しました。1・2年次の入門科目や基礎科目などにおける教育内容の充実をはかることと併行して、3年次以降は授業で得られた知識を積極的に自らの課題として捉え、より多角的にくらしの環境の創造を目指す学修を深められるように指導します。

「**コミュニケーション力**」と「**社会性**」は住まいとくらしの提案が出来る企画力や発想力、表現力と共に、十分なプレゼンテーション能力と社会性の養成を目標とする項目です。「**社会性**」は8項目の中で評価平均が2番目に高く(2.59)、評価レベル3、4を回答した数は全体の60.1%でした。また昨年度まで全体の評価が8項目中最低であった「**コミュニケーション力**」は、レベル3、4の回答数は32.3%から47%となり、評価レベルの平均も昨年度の2.29から2.47に改善しました。「**コミュニケーション力**」改善の理由には、各レベルの説明文中の「日本語能力」の優劣に関する表記を、今年度から「相手の立場/意図の理解」の程度に変更した(【資料1】回答用紙を参照)ことも影響しているようです。各実習系の課題で実施するプレゼンテーションなどの機会を通じて、形式に沿った口頭発表やわかりやすい文章を書くことにつながるよう、継続して指導を行います。

「**専門力**」と「**判断力**」は住居や都市など住空間に関する専門的な知識と、多様な価値観の存在を踏まえた柔軟な思考力の養成が目標です。評価レベル3、4を回答した割合は「**専門力**」が45.5%(昨年度46.7%)であるのに比べて、「**判断力**」は33.3%(昨年度38.7%)であり、また「**判断力**」の平均値は昨年度に引き続き8項目中最も低い評価(2.23)となりました。「**判断力**」のレベルを向上させるためには、実際の建物や作品を観察・体験し、企業実習などを通じて専門的な知識や多様な価値観を修得することが必要です。住まいとくらしに関する事例について、その反証となる事例を挙げつつ論理的に批判・評価させ、学生一人一人の独自の視点や考え方を育むための指導を行います。

「**技術力**」と「**実践力**」は住まいとくらしの空間デザインを提案できる多様な技術力と、それを社会の中で広く応用していく実践力の養成を目標としています。評価レベル3、4を回答した割合は「**実践力**」は43.9%で、昨年度(43.5%)とほぼ同様でしたが、「**技術力**」(37.8%)は昨年度(56.4%)から18ポイントほど評価が下がっています。「**技術力**」の評価下落の理由については、2年次までの基礎的技術の学習に対する達成感の不足が、複数の学生コメントから伺えます。2年次までに得た技術を3年次以降の課

題に柔軟に活用して課題に向き合えるよう指導します。また「**実践力**」については、3年次以降の科目における学修成果が期待されます。

最後に「**自己評価コメント**」の回答内容【資料2】について分析・考察します。記述内容には、入学時と比べてある程度の学習到達度を自覚しているものの、今回の自己評価の機会を経て「(3年次以降は足りない点を)努力していきたい」といったポジティブな回答が多く見られました。記述内容の主な項目としては「文章力・プレゼン力・コミュニケーション力の不足」「専門力・技術力の不足」「発想力・応用力・判断力の不足」「計画力・自己管理の不足」に関する記述が多く見られました。

6) 今後の課題

今回の学修到達度の確認の結果、住空間デザイン学類が目標とする2年修了時までの学習レベルにほとんどの学生が到達できていることが確認されました。今後の課題として、以下の3点を挙げます。

1) 「**判断力**」を身に付けるためには、学生が実際の建物や作品を観察・体験し、企業実習や産学連携課題などを通じて専門的な知識や多様な価値観を修得させ、実践的に学ぶ機会を一層設ける必要があること。住まいとくらしに関する事例について、その反証となる事例を挙げつつ論理的に批判・評価させることで、個々の学生独自の視点や考え方を育むことを目的とする。

2) 「**技術力**」や「**実践力**」を高めるために、住空間デザインに関する問題や課題に対して幅広い視点から向き合わせるように務めること。学生が自らすすんで問題を見つけ、解決に向けた計画手順を立て、実践することができることに重点を置き、制作や実習を通して指導していく必要がある。

3) 3年次以降の担当教員が担当する学生の「**2年修了時 学修到達度**」の内容を把握すること。学生の自己評価の低い項目を補い、適切な指導を行うための資料として、学修到達度確認評価資料を積極的に活用する。

(以上)

【資料1】2022年度住空間デザイン学類「2年修了時 学修到達度の確認」回答用紙

住空間デザイン学類

学修到達度の確認

2022年2年修了時

学籍番号		氏名	
------	--	----	--

教育目標	建築・インテリアデザインから家具、陶芸、織物等くらしの環境に関する基礎的、総合的な知識と、豊かな人間性の養成		住まいとくらしの提案が出来る企画力や発想力、表現力と共に、十分なプレゼンテーション能力と社会性の養成		住まいとくらしの提案が出来る専門的な知識と、多様な価値観の存在を踏まえた柔軟な思考力の養成		住まいとくらしの空間デザインを提案できる多様な技術力と、それを社会の中で広く応用していく実践力の養成	
学修指針	教養力	人間性	コミュニケーション力	社会性	専門力	判断力	技術力	実践力
レベル4	くらしの環境に関する多角的な知識を有し、より良いくらしの環境の創造を目指すことができる。	くらしの環境のあり方を踏まえ、より良い住空間の実現を実践することができる。	相手の立場を理解し、論理的で説得力のある口頭発表ができ、明晰な文章を書くことができる。	住まいとくらしの問題を把握し、自立した社会人にふさわしい責任感を持って共同作業に従事することができる。	住まいとくらしに関するテーマについて論理的に批判し、その批判から新しい独自の考えを育てていくことができる。	住まいとくらしに関する事例について論理的に批判し、その批判から新しい独自の考えを育てていくことができる。	住空間デザインに関する多様な技術力を有し、幅広い視点から問題に向き合い、実践することができる。	自らすすんで問題を見つけ、解決に向けた計画手順を立て、実践することができる。
レベル3	くらしの環境に関する基礎的な知識を有し、自らの問題として考えることができる。	くらしの環境のあり方について問題点を指摘し、より良い住空間を実現するために努力することができる。	相手の立場を理解し、形式に沿った口頭発表ができ、わかりやすい文章を書くことができる。	住まいとくらしの問題について説明することができ、他者とスムーズに共同作業をすることができる。	住まいとくらしに関するテーマについて、多角的に情報を整理した上で根拠を示しつつ考察することができる。	住まいとくらしに関する事例について、その反証となる実例を挙げつつ、論理的に批判することができる。	住空間デザインに関する多様な技術力を有し、問題に応じて実践することができる。	自らすすんで問題を見つけ、解決に向けた計画手順を立てることができる。
レベル2	くらしの環境に関する基礎的な知識を有し、問題点を指摘することができる。	くらしの環境のあり方について自分なりのポリシーを持ち、自己を表現することができる。	相手の意図を理解し、自らの考えをわかりやすく説明することができる。	住まいとくらしの問題について一通り説明することができ、共同作業に加わることができる。	住まいとくらしに関するテーマについて、多角的に情報を整理し、処理することができる。	住まいとくらしに関する事例について、論理的に問題点を見出し考察することができる。	住空間デザインに関する基礎的な技術力を有し、自分なりに応用しながら実践することができる。	与えられた問題に対して、解決に向けた計画手順を立て、実践することができる。
レベル1	くらしの環境について、自分の知っていることを述べることができる。	くらしの環境のあり方に沿ったルールやマナーを尊重することができる。	相手の意図を理解し、自分の考えを述べることができる。	住まいとくらしの問題について説明することができ、他者と関わろうとすることができる。	住まいとくらしに関するテーマについて、情報を集め、処理することができる。	住まいとくらしに関する事例について問題点を見出すことができる。	住空間デザインに関する基礎的な技術力を有し、実践することができる。	与えられた問題に対して、解決に向けた計画手順を立てることができる。
自己診断	該当レベルの数値を記入							

(自己評価コメント)

(担任コメント)

人間健康学部健康栄養学科
2年次「学修到達度の確認」実施報告書

工藤美香、曾我部夏子

1. 実施要領

対象者：健康栄養学科3年生（68名）

実施期間：2023年6月7日（水）～16日（金）

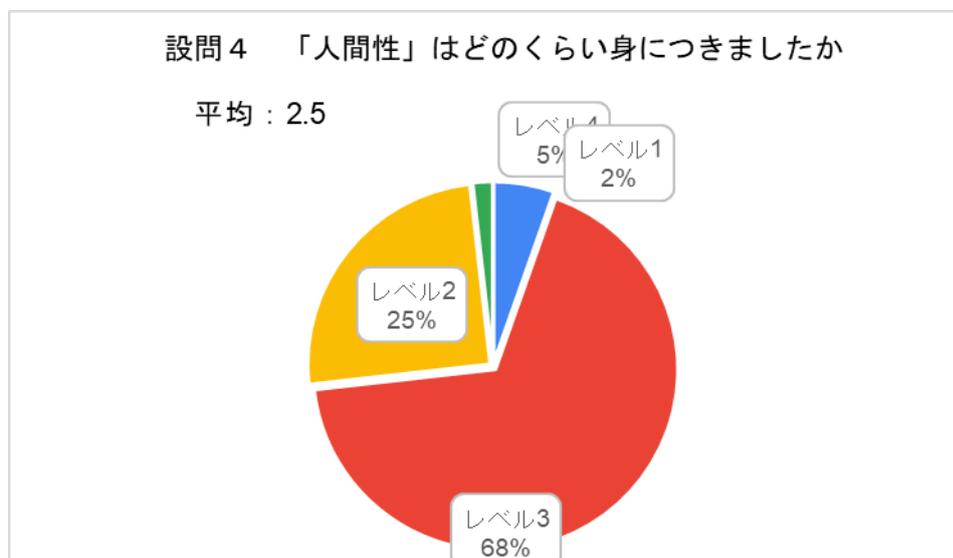
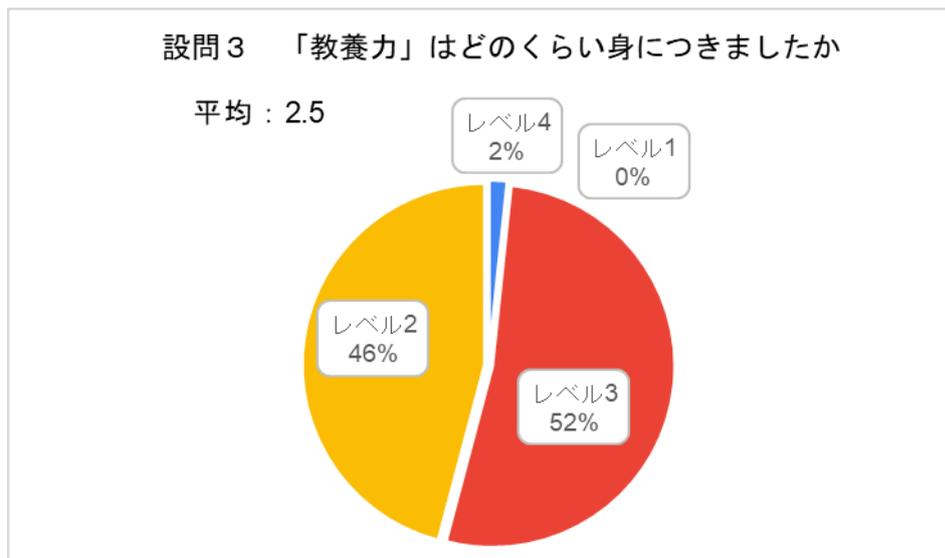
実施方法：G Suite for Education の Form を用いた遠隔方式

2. 質問内容

末尾の添付資料のとおり。8つの学修指針について、それぞれの到達度を4段階で自己評価して回答するよう求めた。

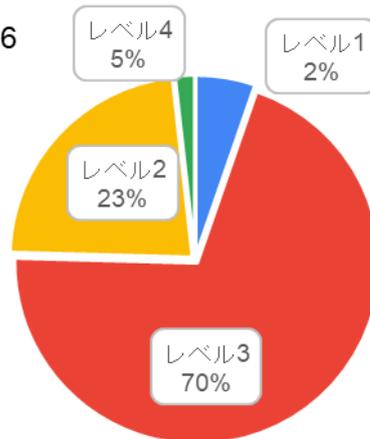
3. 結果

回答者数 62名 [62 / 68 * 100 = 91.2%]



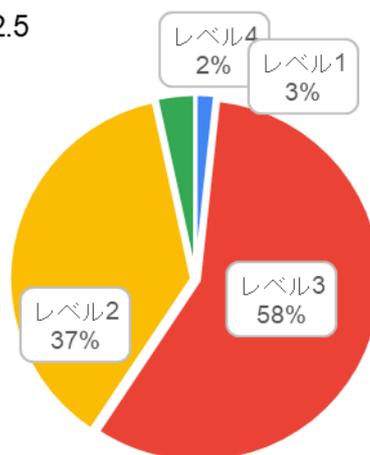
設問5 「コミュニケーション力」はどのくらい身につきましたか

平均 : 2.6



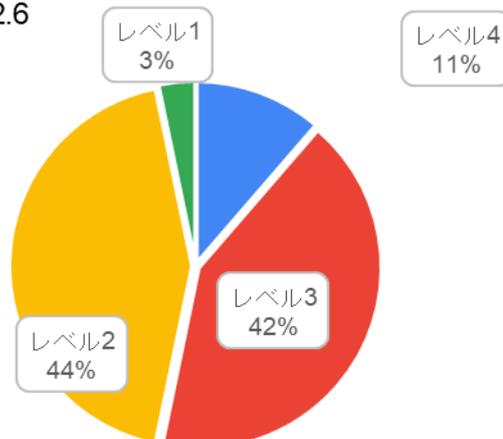
設問6 「社会性」はどのくらい身につきましたか

平均 : 2.5



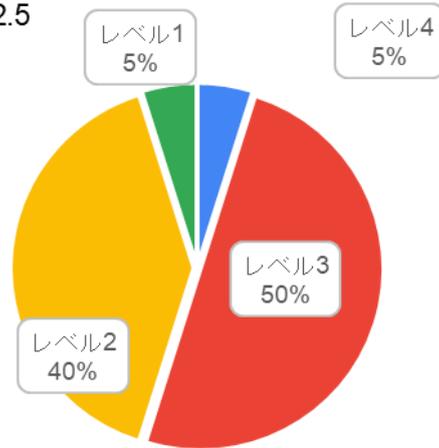
設問7 「専門性」はどのくらい身につきましたか

平均 : 2.6



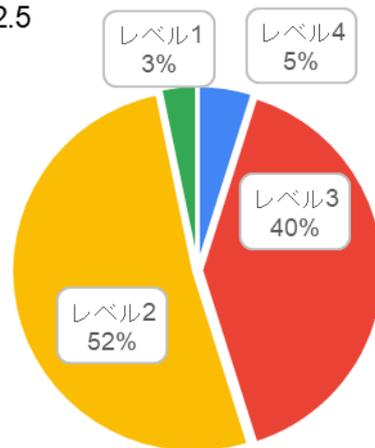
設問8 「判断力」はどのくらい身につきましたか

平均 : 2.5



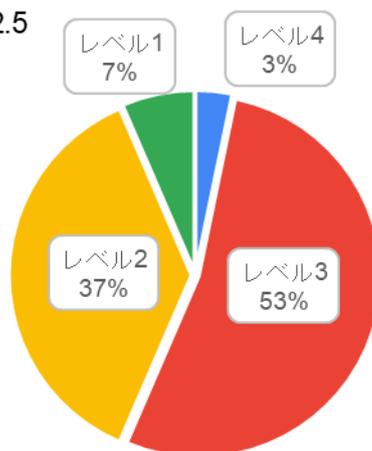
設問9 「技術力」はどのくらい身につきましたか

平均 : 2.5



設問10 「実践力」はどのくらい身につきましたか

平均 : 2.5



4. 検証

学修指針についての到達度の自己診断の結果の平均値は、それぞれの質問項目で2.5～2.6の範囲であった。この結果から、多くの学生は学修到達度がレベル3もしくはレベル2程度と自己診断していた。「人間性」、「コミュニケーション力」について「レベル3」と評価する学生が最も多く、約70%であった。自由記述で「グループワークなどを通して、コミュニケーション力や計画性を得ることができたと感じる。」等の記述があり、2年間の学びを通して、コミュニケーション力の向上を実感できている学生が多いことが推察される。

専門性はレベル2と評価した学生が44%、レベル3が42%であった。自由記述でも「専門性については卒業までにレベル4に達していることが理想です。国試の勉強のためにも専門知識技術などを上げていきたいと思います。」、「多くのことを学び、知識をつけることができたが、不足している部分も多いと感じている。今後、不足していると感じている部分をなくしつつ、実践する力を身につけていきたい。」等のコメントがあった。2年間で専門的な知識が習得できていることを実感しつつも、学ぶなかでさらなる知識やスキルの必要性に気づいており、3年次、4年次の学修を意欲的に進めようと考えている学生が多いと推察される。

前述のとおり、自由記述は前向きなコメントが多かった。「以前よりも何か活動に対して自分から動けるようになったと授業を通して感じるようになりました。」等、大学の学びを通して自分自身の成長を実感している学生が多いことがわかり、1年次、2年次のカリキュラムが概ね学生の成長を上手く引き出せていると判断できる。

5. 今後の課題

学修指針の到達度の自己診断は、2年次終了時点で多くの項目でレベル2もしくは3と回答する者が多く、この時期の自己評価としては妥当な結果である。3年次、4年次での授業を通して、レベル4に到達できるよう、教員がバックアップしていく必要がある。また、今回は授業で回答を促したため、回答率が90%を超えていた。今後の調査の際も回答率を上げるために、授業でのアナウンスを行っていく。

(添付資料)

人間健康学部		学修到達度の確認						2年終了時	
		学籍番号	設問1		氏名	設問2			
教育目標	人間と社会に関する広汎な知識と、他者から信頼される人間性の養成	栄養に係わる職場で役立つ日本語運用能力やプレゼンテーション力と、職業を通して自らの存在を高めていこうとする社会性の養成	健康と栄養に関する専門的な知識と、実地の分析に基づいて的確に判断する能力の養成	栄養管理、栄養指導や保健指導などを確実に実行する技術力と、計画性をもって自らの意志を実現につなげていく実践力の養成					
学修指針	教養力	人間性	コミュニケーション力	社会性	専門力	判断力	技術力	実践力	
自己診断 該当レベルの 数値1～4を 記入	設問3	設問4	設問5	設問6	設問7	設問8	設問9	設問10	
レベル4 最高値	人文・社会・自然科学に関する多角的な知識を有し、より良い文化の創造を目指すことができる。	管理栄養士のあり方を踏まえて広く人間存在について考察し、より良い自己の実現を実践することができる。	論理的で説得力のある口頭発表ができ、明晰な文章を書くことができる。	管理栄養士の社会的責務を把握し、自立した社会人にふさわしい責任感を持って共同作業に従事することができる。	専攻するテーマについて、多角的に情報を整理し、根拠をもとに新しい視点で結論を導き出すことができる。	先行研究について論理的に批判し、その批判から新しい独自の考えを育てていくことができる。	専攻する研究対象について、独自の分析方法を確立し、説得力のある結論を発表することができる。	自ら課題を見出すことができ、自分なりの方法論を駆使して、計画的に解決にまで導くことができる。	
	2年間での学修として、よく身についたと思う人は「4」を記入してください。入学前からレベル4相当の高い能力を有していたと思う人も「4」を記入してください。								
レベル3	人文・社会・自然科学に関する基礎的な知識を有し、自らの問題として考えることができる。	管理栄養士のあり方について問題点を指摘し、より良い自己を実現するために努力することができる。	形式に沿った口頭発表ができ、わかりやすい文章を書くことができる。	管理栄養士の社会的責務を説明することができ、他者とスムーズに共同作業を行うことができる。	専攻するテーマについて、多角的に情報を整理した上で根拠を示しつつ考察することができる。	先行研究について、その反証となる実例を挙げつつ、論理的に批判することができる。	専攻する研究対象について、複数の分析方法を組み合わせて解決を探ることができる。	自ら課題を見出すことができ、それらの解決に向けて成果をあげるることができる。	
	2年間での学修として、だいたい身についたと思う人は「3」を記入してください。								
レベル2	人文・社会・自然科学に関する基礎的な知識を有し、問題点を指摘することができる。	管理栄養士のあり方について自分なりのポリシーを持ち、自己を律することができる。	得た情報を整理し、自らの考えをわかりやすく説明することができる。	管理栄養士の社会的責務を一通し説明することができ、共同作業に加わることができる。	専攻するテーマについて、多角的に情報を整理することができる。	先行研究について、論理的に矛盾点を見出し批判することができる。	専攻する研究対象について、一つの分析方法を用いて結果をまとめることができる。	与えられた課題に取り組み、ほぼ十分な成果をあげることができる。	
	2年間での学修として、ある程度身についたが、不足している内容も目立つと思う人は「2」を記入してください。								
レベル1 最低値	人文・社会・自然科学の内容について、自分の知っていることを述べるができる。	管理栄養士としてのあり方に沿ったルールやマナーを尊重することができる。	正しく情報を受け止め、人前で物事の簡単な説明ができる。	管理栄養士の社会的責務に関する程度説明することができる。	専攻するテーマについて、情報を集めることができる。	先行研究について批判的に対することができる。	専攻する研究対象について、一つの分析方法を持つことができる。	与えられた課題に取り組み、ある程度の成果をあげることができる。	
	2年間での学修として、初歩しか身についておらず、不十分な点が多いと思う人は「1」を記入してください。まったく身につけていないと思う人も「1」を記入してください。								
(自己評価コメント)									
設問11									

2023年11月22日

教育研究推進センター 宛

看護学部看護学科
主任 杵淵恵美子

2023年度看護学部看護学科学修到達度の評価結果について（報告）

標記の件につきまして、看護学部看護学科のカリキュラム・ポリシーに基づき、学生の学修到達度について自己評価表を用いて評価を実施したので、その結果について報告いたします。

1. 対象学年：看護学部看護学科3年生
2. 実施時期：2023年9月11日(月)～9月13日(水)
3. 評価方法：3年次後期に開講する領域別実習前の援助技術演習を実施直後に、GWEの当該学年クラスルームにて、Google Formsを用いて学修到達度のうち「コミュニケーション力」「専門力」「判断力」「技術力」「実践力」の5項目について4段階での自己評価を求めた。
4. 結果：実施者65名中回答58名（回答率89.2%）

表1に各評価項目のレベルごとの回答者割合と平均値を示す。

	レベル1 (可)	レベル2 (良)	レベル3 (優)	レベル4 (秀)	平均値
コミュニケーション力	9(15.5)	17(29.3)	27(46.6)	5(8.6)	2.47
専門力	10(17.2)	37(63.8)	9(15.5)	2(3.4)	2.05
判断力	17(29.3)	24(41.4)	14(24.1)	3(5.2)	2.05
技術力	13(22.4)	33(56.9)	9(15.5)	3(5.2)	2.05
実践力	8(13.8)	23(39.7)	24(41.4)	3(5.2)	2.37

コミュニケーション力は平均値2.47でありレベル4と回答した学生もおり、他の項目と比較し高い。全ての項目で平均値は昨年度を上回っており、2.0以下の項目はなかった。昨年度は「専門力」「判断力」「技術力」が2.0を下回っており、「専門力」「実践力」ではレベル4が0人で、コロナ禍の影響を受けた授業運営の結果と推測されたが、今年度はほぼ通常の対面授業が実施でき、演習授業などから学生の自己評価も上がったと考える。3年次後期から開講する領域別実習や4年次前期科目である統合実習などの臨床の場における学びのなかで、これらの能力のさらなる向上が期待される。

5. その他

<調査項目 詳細>

(説明) 現段階(3年生前期終了時点)での自分の看護実践能力について「コミュニケーション力」「専門力」「判断力」「技術力」「実践力」の項目ごとに学習到達度を自己評価してください。自己評価は、4段階で行ってください。

1: レベル1 (可)、2: レベル2 (良)、3: レベル3 (優)、4: レベル4 (秀)

設問1 「コミュニケーション力」について、下記の説明文を参考にして、4段階で自己評価してください。

レベル1 (可): 相手の話を聴くことができ、その相手の話に対して自分の意見や思いを伝えることができる。

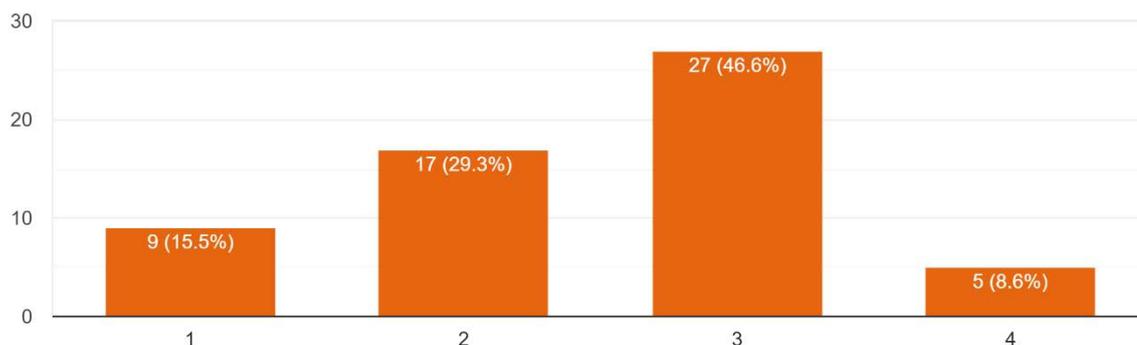
レベル2 (良): 相手の価値観を認め、感情的にならずに相手から適切な情報を引き出し、自分の思いや意見を伝えることができる。

レベル3 (優): 相手の価値観を認め、自分の思いや意見との相違を認識しながら肯定的で前向きな関係性をとることができる。

レベル4 (秀): 多様な価値観を尊重し、相手の発言や態度・行動を肯定的に受け止めながらコミュニケーションを発展させることができる。

コミュニケーション力

58件の回答



設問2 「専門力」について、下記の説明文を参考にして、4段階で自己評価してください。

レベル1 (可): 看護の専門領域についての基礎的な知識を有している。

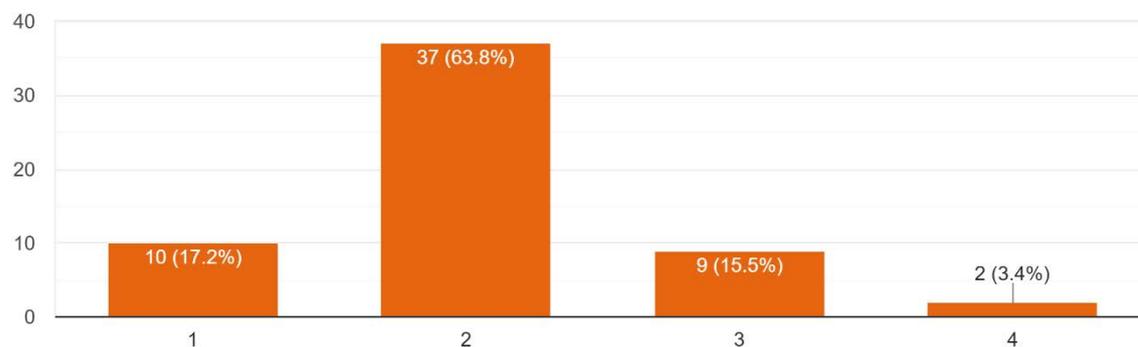
レベル2 (良): 看護の専門領域の知識を活用して、課題を見出すための情報収集ができる

レベル3 (優): 看護の専門領域の知識を活用して、根拠に基づいて課題解決方法を考えることができる。

レベル4 (秀): 看護の専門領域の知識を活用して、根拠に基づいた実践をすることができ、常に自己研鑽し続けることができる。

専門力

58 件の回答



設問3 「判断力」について、下記の説明文を参考にして、4段階で自己評価してください。

レベル1（可）：看護をめぐる諸問題について関心を持ち、収集したデータから自分なりの判断ができる。

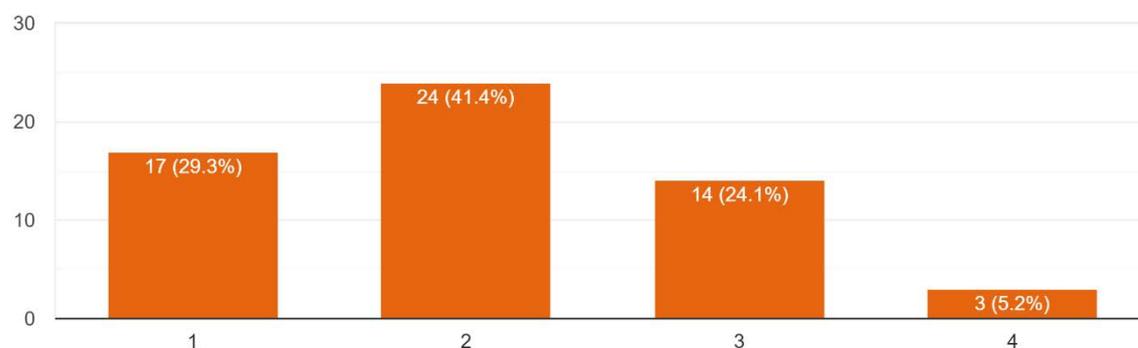
レベル2（良）：看護をめぐる諸問題についてデータをもとに客観的に矛盾のない判断ができる。

レベル3（優）：看護をめぐる諸問題について、客観的・論理的に判断するとともに、自己の判断を顧みることができる。

レベル4（秀）：看護をめぐる諸問題について、客観的・論理的に判断をし、自己の判断を常に顧み、責任をもって行動することができる。

判断力

58 件の回答



設問4 「技術力」について、下記の説明文を参考にして、4段階で自己評価してください。

レベル1（可）：課題に自ら取り組む姿勢を持ち、指導を受けながら実践することができる。

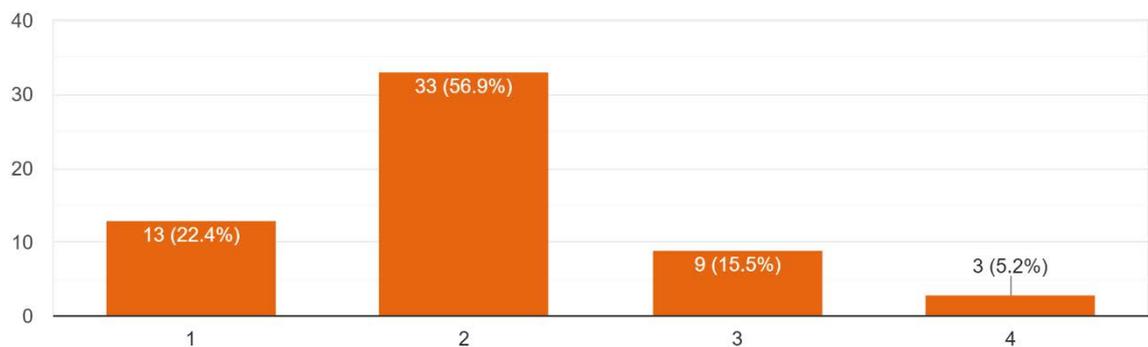
レベル2（良）：課題に自ら取り組み、指導を受けながら実践し、成果をあげることができる。

レベル3（優）：自ら課題を見出すことができ、それらの解決に向けて指導を受けながら成果をあげることができる。

レベル4（秀）：自ら課題を見出すことができ、根拠に基づいた看護実践ができる。

技術力

58件の回答



設問5 「実践力」について、下記の説明文を参考にして、4段階で自己評価してください。

レベル1（可）：課題に自ら取り組む姿勢を持ち、指導を受けながら実践することができる。

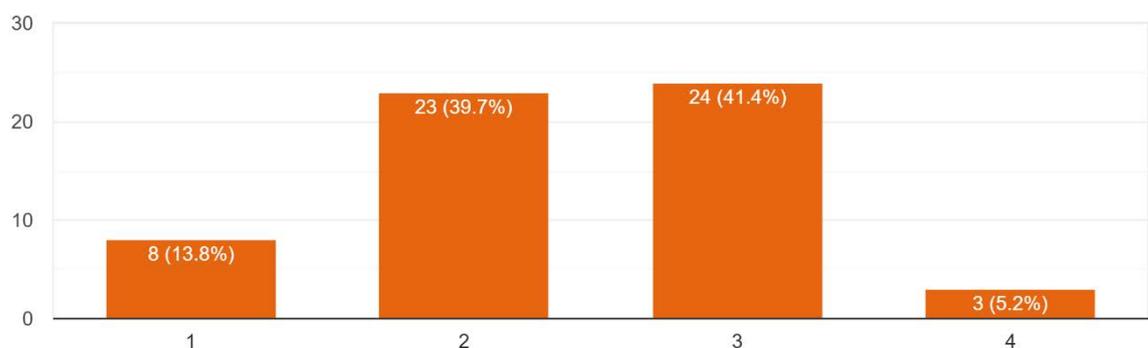
レベル2（良）：課題に自ら取り組み、指導を受けながら実践し、成果をあげることができる。

レベル3（優）：自ら課題を見出すことができ、それらの解決に向けて指導を受けながら成果をあげることができる。

レベル4（秀）：自ら課題を見出すことができ、根拠に基づいた看護実践ができる。

実践力

58件の回答



補 足

看護学部看護学科では『3年次の領域別臨地実習開始前には、客観的臨床能力試験（OSCE：Objective Structured Clinical Examination）を実施し、看護学生としての知識、技能、態度が一定基準に到達しているかを5つの能力（コミュニケーション力、専門力、判断力、技術力、実践力）を4つの水準（レベル1～レベル4）で評価する』と定めているが、2020年度以降、新型コロナウイルス感染症によりOSCEは中止せざるを得ない状況となっている。2023年度においてもその影響は残存していたが、通常の講義・演習での技術演習に戻りつつあった。

そのような状況の中、今年度が3年次にOSCEを実施する旧カリキュラムの最終年度であり、試験形式(OSCE)で実施するよりも前年同様の形式で実施し比較検討することが有用と考えた。そのため、後期から開始される領域別実習に向けて、援助技術演習形式で復習の機会を提供して、達成の程度を4つの水準（「看護学科学習到達度確認表」の学習指針該当項目のレベル1～レベル4）で自己評価することとした。

2022年度 駒沢女子大学

「学修到達度の確認」実施報告書

2年次終了時の報告書

3年次終了時の報告書

2024年4月9日

教育指針に関する検討委員会